

El legado humano de la Misión Hasekura

支倉使節団の残した人間的な絆

Elena Gallego Andrada

上智大学准教授

エレナ・ガジェゴ・アンドラダ



支倉常長が、メキシコ、スペイン（フェリーペ3世と謁見）、イタリア（教皇パウロ5世と謁見）への7年に及んだ長い旅を終えて日本に帰国しようとした時、その使節団のメンバーのなかに、スペインに残った者たちがいた。

やがて、コリア・デル・リオという町に定住した、多くは侍だった日本人のなかからハポンという名字が現れてきた。この町は、スペイン南部、アンダルシア地方のサン・ルカール・デ・バラメーダからグアダルキビル川をさかのぼったところにある。ハポンという名字はここではかなり一般的だが、他の土地では非常に珍しい。

ハポン姓

ハポン姓は、コリア・デル・リオで1647年頃、現れ始めたとされる。

しかし、町の文書館のエストレーリャ教会の洗礼と結婚に関する教区台帳には、1667年まで、この名字は出てこない。この1667年、フアン・マルティン・ハポンとマグダレナ・デ・カストロの娘カタリナの洗礼が記録されている。その後、1673年10月11日には、アンドレス・ハポンとレオニナ・デ・ケベドの息子ミゲル・ハポンに洗礼が授けられたことが記録されている。このアンドレス・ハポンとフアン・マルティン・ハポンとが、コリア・デル・リオでハポンという名字を持った最初の人物の子孫、つまり2世か3世であると考えられる。

1673年に実施された、ポルトガルとの戦争の徴兵目的の住民人口調査では、ヌエバ通りにバルトロメ・ハポンという人物が居住していたと記録されており、この頃から、ハポンという名字が頻繁に出てくる。

しかし、残念なことに、コリア・デル・リオでは、1604年から1665年までの一切の洗礼記録が保存されていない。つまり、セビリアとコリアに支倉使節団が到着した1614年から1665年までの51年間に関しては記録が欠落しており、その間のハポンという姓の手がかりはないのだ。

コリア・デル・リオのハポン姓の人々

1989年の市勢調査のデータによると

第一姓としてのハポン（父方の姓）	3 2 1
第一姓と第二姓としてのハポン（父方と母方）	9
第二姓としてのハポン（母方の姓）	5 0 0
合計	8 3 0

セビリアにもハポン姓の人が180人ほど存在するが、彼らの祖先はコリア出身である。つまり、約1000人がハポンの直系で、さらにコリアの全人口（約21,000人）の4%にあたる住民がハポンという名字を持つ家族と何らかの関係があると言われている。というのも、ハポン姓を失ってはいても、東洋の容貌を残している人がたくさんいるからである。

ハポン姓の由来

現代では、日本の侍のことを単数形で“caballero japonés”（日本人の紳士）、複数形で“caballeros japoneses”（日本人の紳士たち）というが、その時代には“caballero Japón”（日本の紳士）、“caballeros japones”と呼んでいた。ここから、ハポンという姓がつけられたと考えられる。

というのも、スペインの他の多くの名字も同様に形成されたからである。例えば、González という姓は、「Gonzaloの息子」という意味であり、Fernández という姓は、「Fernandoの息子」という意味から来ている。

当時の多くの書類の中で、昔のカスティーリャ語とラテン語で、支倉は、“El Japón”（エル・ハポン）と呼ばれている。また、地名であるハポンが、彼らが受け入れた洗礼名のすぐ後ろに、名字として付け加えられたことも、書類上確認することができる。

一方、メキシコのアカプルコ¹にも、1614年の1月末からイバニェス神父と一緒に残った侍たちの子孫がいる。ソテロ神父とイグナシオ・デ・ヘスス神父、支倉とその使節団30人



¹ Véase Flack Reyes, Melba y Palacios, Héctor, *El japonés que con la Guadalajara del S. XVII*, Universidad de Guadalajara, Biblioteca 2010.

のメンバーと一緒にヨーロッパに向かい、大西洋海岸までの船旅を続けたその年、ヨーロッパに向かわず、その地に留まることを選んだ者たちがいたのである。

しかし、彼らのメキシコでの子孫は、田中や鈴木といった日本の普通の名字をもっていたので、共通の名字ハポンで一括されることはなかった。

そのひとつの理由として、コリアが小さい町であったことに比べて、アカプルコの面積は広大で、アカプルコでは、個人を名字ではっきり区別する必要があったはずだからである。

加えて、この時、メキシコに定住した日本人の多くは商売人であったため、おそらく人々は、彼らのことを「日本の紳士たち」とは呼んでいなかったに違いない。だからこそ、彼らは日本の固有の名字を変更することなく維持できたのである。

また、両国に残った日本人の数にも関係がある。

当時、スペイン領であったメキシコでは、旅を続けるための許可を全員が得ていたわけではなかったため、ここに使節団の半分以上が残った。これは、150人中の約120人に及ぶ。

一方、支倉に随行してコリア・デル・リオに到着した日本の侍は、わずか30人だった。そのうちの半分15名は、彼と一緒にローマに行き、残ったメンバーの15人が、一行が戻ってくるのをコリアで待っていた。ローマへ行った一行が帰還すると、全員で、支倉とソテロ神父とともにセビリアから3レグアほど離れた、コリア近くのヌエストラ・セニョーラ・デ・ロレット修道院に向かい、そこで、スペイン国王フェリーペ三世の返事を待ちながら、約一年にわたって滞在した。

1616年、一行に国王から帰国命令が出た。それに従って、フライ・ファン・デ・ラ・クルスが13人と一緒に日本に帰った。しかし、ソテロ神父と支倉は、支倉がジェノヴァに行った時にかかった熱病の快復を、神父は骨折した足の快復を待って、そこに留まる。そこには、国王からの返事もなく、また懇願した願いも叶えられないままで帰ることを拒んでいたという理由もあった。一方で、当時の日本の状況が、更なる司祭の派遣をというソテロ神父の希望を支援することを、国王に思いとどまらせていた。

結局、1617年7月4日、5人の日本人家来と一緒に、支倉はその年の船団で出発した。

ところで、支倉に同行してスペインに一年にわたって残っていた日本人は何をしていたのだろうか？ その後、支倉と一緒に帰らなかった人々は何をしていたのか？ 彼らが、一年中、修道院に閉じこもっていたとは考えられない。

しかし、当時、セビリアが、商業活動において世界で最も重要な都市のひとつであったことを思い返すなら、彼ら日本人のなかに、その町での商業社会に入り込むことを考えた者がいたとしても不思議ではないだろう。

彼ら30人の日本人に関する当時の書類では、1614年に使節団がセビリアに到着した当時のことを述べられている。すなわち、2年後の1616年に19人が乗船し、翌年の1617年に、支倉が5人の家来と一緒に、かの地をあとにしたという確かな記録があるのだ。

このデータから、多く見積もって6人、あるいはそれよりも少ない数の日本人が最終的にコリア・デル・リオに残ったと考えることが可能である。

支倉使節団の人的な絆として、スペインで日本人の血が継承されたという事実は、歴史的にも興味深く大きな謎でもある。なぜなら、1600～1639年の間、多くの日本人が日本をあとにして、アジア諸国に住んでいたにもかかわらず、マニラ（ルソン）の3000人とシャム（タイ）の800人に及んだ当時の在留日本人の痕跡は残っていないのである。

支倉に随行した侍に関する資料

支倉に随行してローマに行ったメンバー全員の名前（例えば、スケイチロウ、トクロ、イタミムネミ、ヤマザキカンスケ、ヤマグチカンジュロウ、ヌマノハンベイ、サトウクラノジョウ）、さらには、彼らが洗礼の際に授かったそれぞれの洗礼名まで、今日では明らかになっている。また、支倉とともに1620年、日本に帰国した3人のメンバーの名前も（クロカワイチノジョウ、クロカワロクエモンとマツオダイゲン）疑う余地はない。

しかしながら、支倉の護衛隊長が残ったという情報はあるものの、スペインに残った日本人のことはほとんど知る術がない。

当時のある資料は、セビリアへの彼らの入市を次のように述べている。

「10月23日水曜日、仙台藩主・伊達政宗に派遣された支倉六衛門大使がセビリアに入った。彼は、護衛隊長と12人の弓の射手や矛槍兵とともに、刀を携えた30人の日本人侍を従えてやってきたが、その隊長はキリスト教信者で、名をトマスといい、日本人殉教者の息子だった。」

ハポン姓の研究者であるピクトル・バレンシア＝ハポンの報告書によると、トマス・フェリペ・カバジェロ＝ハポンという人が1622年バダホス県のサフラで農業に携わっていたらしい。この人物こそ、グアルダカサル副王がアカプルコで刀を取り上げはしなかったトマス隊長であり、＜日本人の殉教者の息子、トマス氏＞でありえる。

前述の内容をもう少し説明する。メキシコに到着したばかりの日本人たちの中には、誇り高く好戦的な性格であったため、アカプルコ滞在早々に騒動を引き起こした事例があり、そのため、1614年3月4日、副王が、滞在中のトラブルを防ぐために、支倉大使とトマス隊長を含む彼の家来6人を除く、全員から刀を取り上げるように命令したのである。

むろん、これらの刀はしかるべく保管され、彼らの母国への帰国直前には返還されたに違いない。

この隊長はフェリーペⅢ世の宮廷で洗礼を授かった者のうちのひとりであり、その後、支倉と共に主イエズス・キリストの呼びかけを感じ、鬣を切り落とし、刀を捨てた。こうして、日本人修道士となって、キリストを崇拝することに身を捧げたのである。その後、彼は、修道会を捨て、ディエゴ・ハラミーリョという人物に召し使いとして仕えた。これは、旧世界での恩人に出会ったと思ったからであったが、実は、この彼の新しい主人となった人は腹黒い人で、彼の奉公に対して賃金を支払うことを拒んだうえ、彼を奴隷扱いして、焼き印を押すように命令した。そのため、彼は、当時の君主フェリーペⅣ世に裁きを求め、その涙を誘う嘆願書のなかで、彼の苦悩を陳述して訴え出た。

この嘆願に、インディアス諮問会議は、1622年9月26日の会議で、恒例通り簡潔に次のように判断を下した。「帰国の許可を与えよ」

こうして、1623年6月7日、セビリアの役人は、ドン・トマス・フェリーペ・ハポンは、ヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）の船で、日本へと出航したと記録している。

しかし、これが事実であるかどうかは疑わしい。というのも、キリスト教徒に対する最も厳しい弾圧がはじまっており、日本はすでに鎖国の状態になっていたからである。つまり、それ以前に海外に渡航した日本人は誰も帰国することができなかったのだった。

このキリスト教徒迫害のひとつの理由として、ヨーロッパでの紛争や独立戦争の余波が、日本にまで押し寄せていたということが挙げられる。当時のオランダは、スペインと戦争状態にあったということを思い起こしてほしい。このため、当時の日本の幕府にかなりの影響を及ぼしていたオランダ人のなかに、スペイン人が、キリスト教布教を通じて、侵略の手筈を整えていると徳川家康に信じ込ませた人たちがいたのである。

マドリッドのサン・ペドロ教会に残っている死亡者記録には、ある重要な記述が残されている。その内容は、「フランシスコ・マルティネス・ハポン、1616年7月15日死亡」というものだ。彼は、メキシコで通訳として支倉の一行に参加、教皇パウロⅤ世との謁見に際しては、ローマまで彼らに同行し、支倉と共にローマ市民権の特権を授かった8人のうちの一人であったと思われる。支倉使節団到着以前に、メキシコにハポンという名前の人物が存在していたということは、非常に不思議である。おそらく、この名字継承にまつわる何らかの秘密をこの人物が握っているに違いない。

この2人の人物、つまり、トマス隊長とフランシスコ・マルティネス・ハポンが、現在わかっているところでは、支倉使節団のスペインでの苦節の足取りを辿ることのできる最後の人物であるということになる。

支倉使節団について

支倉使節団には、多くの疑問と謎がある。

例えば、メキシコとスペインに滞在した日本人はどうなったのか？ なぜ、徳川家康はルイス・ソテロ神父の計画を拒み、伊達政宗はそれを支援したのか？ なぜ、伊達政宗はこの使節団の大使として支倉を選んだのか？ なぜ<侍>支倉の姿は1620年の日本への帰国後、歴史の中に消えてしまったのか？ 仙台市近くに支倉常長の3つの異なる墓があるのはどうしてなのか？ おそらく、これは、彼が亡くなった日にまつわって、異なる説が3つあるということだろう。

いずれにせよ、私たちが把握しているのは、彼は、日本に帰国した2年後の1622年に、謎に満ちたまま亡くなったらしいということである。なぜなら、その頃の状況に関していかなる文書も保管されていないからである。しかし、その一方で、彼が84歳まで生きていたとする言い伝えのある。

支倉は、1615年2月17日、マドリッドのデスカルサル王室礼拝堂で、国王フェリーペⅢ世とフランス王妃の御前で、レルマ公爵とバラハス伯爵夫人とを代父母に洗礼を受けた。そして、フェリーペ・フランシスコの洗礼名を受けた。ルイス・ソテロ神父はその時の模様を次のように記述している。

「支倉大使は、非常に敬虔な面持ちで洗礼を受けた。彼に聖水を与え終わるとすぐに、王室礼拝堂では、オルガン演奏のもと、讃美歌“Laudate Dominus”がはじまり、教会が天国のように思われた。洗礼の儀式が終わるや、私たちは主任司祭と代父母のところにお礼を申し上げにいった。彼らは、お祝いの言葉を大使に述べながら、非常に喜んで私たちに対応してくださった。レルマ公爵と支倉が王の足元にひざまずくと、王は大使に立ち上がるように言葉をかけ、お祝いの言葉をおっしゃりながら、愛情と喜びいっぱいに彼を抱きしめた。支倉は、自分は世界で一番幸せな人間だと思おうと王に伝えた。なぜなら、キリスト教徒になるという望みがかなえられたことと同時に、王の御前で洗礼式が行われたこと、そして何よりも、国王ご自身の名前を洗礼名として受取るようにという想像だにできなかった命を受けたことで、とても光栄かつ高貴に思われたからだった。彼は主イエズス・キリストに心から感謝し、また王に対しては、



もし日本でこのことが知られたら、日本人の魂にとって大きな励みとなるだろうと伝えた。」

日本に帰国しても、支倉は、キリスト教信仰を捨てなかったばかりではない。それどころか、彼の妻と息子もキリスト教徒となった。

支倉は、無謀かつ危険な長期の航海をして大洋を渡るようにという、日本に生きて戻れるという保証もない伊達政宗の命令を、躊躇することなく承諾したにもかかわらず、帰国したときには、キリスト教を捨てよとの政宗の命令に従うことができなかった。そのため、せめて政宗に厄介事をもたらさないようにとの思いから、亡くなるまでの2年間、静かに過ごすことを彼は自分自身に課したのだった。

支倉について、また、彼の性格や人格について書き記されたものは多い。

しかし、彼自身が書き残した手紙ほど、私たちに明瞭に彼の人柄を説明してくれるものはない。とりわけ、16歳になる彼の息子支倉ケンザブロウ宛に、マニラから書いた手紙はまさにそのようなものといえる。この手紙の彼の言葉一言一言には、支倉のすばらしい人間性と偉大さが表れている。家族、妻、母親を心配する彼の思い、一日も早く彼らのもとへ帰国することを望む彼の気持ちが書き記されている一方、彼らに心配をかけないようにとの思いで、彼らが経験した貧窮の状況に関しては一切触れていない。（メキシコでは多くの問題があり、彼らは所持していた5万ペソの大部分を没収されていた）ちなみにこの手紙は現在、仙台市博物館に保管されている。

おそらく、支倉は、キリスト教に改宗するにあたり、難しい時期を過ごしたであろうし、気持ちも混乱したに違いない。なぜなら、侍というものは、同時に二人の主君に仕えることができなかつたからである。しかしながら、私たちは、彼が、その死に至るまで正真正銘のキリスト教徒侍であったと断言できる。

結論

数々の困難に屈することなく、信念をもって最後までやりとおしたソテロ神父のエネルギーかつ猛烈な性格にもかかわらず、支倉使節団が得たものは、彼らの最初の目的に関して言うならば、その成果は、最小限のものにとどまった。というのも仙台市の月の浦港を1613年10月28日に出発して間もなく、1614年には日本でのキリスト教徒に対する最も厳しい弾圧が始まってしまったために、支倉使節団は、その意義を失ったからである。

その弾圧は、それ以降も、まったく緩和されることはなかった。最高権力によって続けられたこの執拗な迫害は、スペイン国王並びにローマ教皇との外交上の壁を作ることになる。

支倉とその一団は、その年の聖週間をメキシコで過ごした。その儀式は非常に荘厳に祝われ、家来のうち78人が洗礼を受けた。まさにその頃、彼らが旅立った日本では、1614年2月1日、外国人修道士の追放という勅令が交付されていたのだが、彼らはそんなことなどまったく知る由もなかったのである。

実際、これに先立つ1613年、ソテロ神父は、江戸で突発的に行われたキリスト教徒に対する迫害によって危うく死刑に処せられるところを、伊達政宗の助命嘆願のお陰で、その間際のところで助けられ、支倉使節団に加わったという経緯がある。

さらに、さかのぼること17年、1597年には、長崎で26聖人殉教者が十字架に磔の刑に処せられており、また、支倉が、日本に戻るための許可とその船を待ち望みながら、フィリピンに滞在していた1619年には、京都でも、鴨川の川岸で51人が火炙りの刑にされるという、キリシタンの大受難が起こっていた。

それにもかかわらず、支倉使節団は、キリスト教への熱心な信仰の手本を示し、加えて、彼らのすばらしい徳性と彼らが遂行した偉大な努力は、ひとつの模範を示してくれた。さらに、その上、彼らはスペインにすばらしい贈り物、つまり、ハポンという名字を残してくれたのである。

コリア・デ・リオでは、現在も、この名字を持つすべての人が、侍の血を受け継いでいることを大変誇りに感じており、日本、とりわけ仙台市を第2の故郷のように考えている。

1989年11月、仙台市で市制100周年記念式典が催された。

セビリア市もこれに参加し、同市の古文書館に保存されていた非常に価値のある文書のひとつを、仙台市に譲渡することで、この行事に貢献したいと考えた。その文書とは、1613年に仙台から、すなわち、慶長遣欧使節団の派遣者であり陸奥の広大な藩主伊達政宗が、セビリア市に宛てた手紙であり、その中で「世界でもっとも知られた高名なるセビリア市」として同市を称えているものだった。



300年を経た後に、信書によるメッセージによって、仙台市と日本に対する友好関係は復活したのである。それはまさしく17世紀初めにこれほど異なり、また、遠く離れた2つの文明を敢えて結び付けようと試みた、冒険的な使節団のお陰であり、それが、日本と西洋との間に生まれた初期の外交接触のひとつとなったのである。

この行事には、セビリア市長と侍の子孫であるカルバハル・ハポン氏とが招待された。

後に、筆者は、コリア・デル・リオで、同氏に幸運にも知り合う機会を得た。このイベントについて、ハポン氏は筆者に、

「日本語は話せなかったけれど、コミュニケーションをとることに何の問題もなく、何より、日本に帰国した侍の子孫と知り合えたことに非常に感動した」と話してくれた。

ひとつの歴史的事実の子孫であるということが、言葉の壁を越えて彼らの心を結び付けたのである。心の通うコミュニケーションをとるには、言葉だけが唯一の限られた手段ではないというすばらしい実例である。

支倉使節団に関して、教皇ヨハネ・パウロ二世が日本訪問の際に述べられた言葉を訳して、この発表のしめくくりとする。

「支倉常長が対話を通して東洋と西洋とを結び付けるべく惜しみない努力をしたときから約4世紀を経た今日、私たちは、意思疎通のためのその偉大な挑戦を、まさに引き継ぐべきすばらしい模範として心にとどめるべきである。」

参考文献

- Amati Scipione, *Historia del regno di Voxú del Giapone, dell'antichita, del suo Re Idate Masamune delli favori chha fatti alla Christianità*, Capítulo XXIII, 1615.
Archivo General de Indias (A. G. I.), 1616.
Archivo Parroquial de Coria del Río.
Archivo Parroquial Iglesia Estrella.
Amati Scipione, *Historia del regno di Voxú del Giapone, dell'antichita, del suo Re Idate Masamune delli favori chha fatti alla Christianità*, Capítulo XXIII, 1615.
“Azotea”, Revista cultural del Ayuntamiento de Coria del Río, Números 6 y 7.
Archivo General de Indias (A. G. I.), 1616.
La Embajada de Japón de 1614 a la ciudad de Sevilla,
Flack Reyes, Melba y Palacios, Héctor, *El japonés que conquistó Guadalajara. La historia de Juan de Páez en la Guadalajara del S. XVII*, Universidad de Guadalajara, Biblioteca Pública del Estado de Jalisco Juan José Arreola, 2010.
Gil, Juan, *Hidalgos y Samurais*, Alianza Editorial Madrid,
ヒル, J. 『イダルゴとサムライ、16・17世紀のスペインと日本』 平山篤子訳、法政大学出版局、東京、2001。
Morales Padrón, *Memorias de Sevilla*, Noticias del S. XVII, 1981.